様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６７９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２１５

研究課題名（和文）形成的アセスメントの６要素による音楽科授業改革

研究課題名（英文）Improving Music Teaching through the Application of Six Elements Assessment

研究代表者
丸山　忠璋（MARUYAMA, Tadaaki）

武蔵野音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：７０２９３１６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円、（間接経費）　　300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「形成的アセスメント」に基盤を置く音楽科授業を推進するために、それを成立させる諸要素について考察したものである。
　丸山は、形成的アセスメントの概念およびそれを成立させるための要件を６項目に整理し、志木市、犬山市、秋田市、秋田県およびフィンランドにおいて現状を調査するとともに、最新の教育学からの知見を援用しつつ今後の音楽授業の方向性について考察した。森田は、「学び続ける教師像」を目指すPDCAサイクルの活用について研究した。山﨑は、小学校教員とのネットワークを介した情報交換による音楽鑑賞指導に関して研究した。平田は、音楽鑑賞の指導場面における音楽テクノロジーの可能性について研究した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to discuss the elements supporting formative assessment,with a view to improving music teaching.
Maruyama outlined the concept of formative assessment and found six requirements for establishing the concept, and he discussed the direction of music classes in the future, utilizing insight gained from recent achievements in pedagogy. Morita confirmed that utilizing the PDCA cycle in the teacher education could lead to the establishing of a new image of the teacher who sustains the new concept of learning and who also keeps on learning. Yamazaki found, through correspondence with four elementary-school music teachers, that the teaching method was varid for instruction in music appreciation class. Hirata investigated the possibility of music using technology in teaching music appreciation class. As a result, it was confirmed that the activities aided by tablet-type terminals and the cloud can facilitate the achievement of formative assessment.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教科教育学・各教科の教育（音楽）

キーワード：音楽教育学　教科教育　音楽　音楽科の評価　形成的アセスメント

１．研究開発当初の背景

(1)今日、日本の学校の各教科の学習評価は、「観点別学習状況」評価による「目標に準拠した評価」を基本として行われている。しかしながら、なお、音楽科の学習のように、対象が時間芸術であり、所産が集団内の相互の人間関係によって形成され、表現や感受において個人の価値感情が重視される学習においては、一律の到達基準設定や達成度による評価方法ではさまざまな問題を生じている。

(2)先行する研究「音楽科評価に関する研究――量的評価から質的評価への転換をめざして――」（平成 20･21･22 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究代表者：丸山忠璋）において、音楽学習の本質に即した、集団による創造的活動の意味や一人一人のよさや個性を重視する「質的評価」のあり方を模索してきた。その結果、音楽科の学習評価は、到達度による外部判定的な評価から、個人による内部評価を重視した、形成的な、音楽活動の本質に即した、より児童生徒の音楽的成長を促す質的な評価へと転換させる必要があると判断した。

(3)教員の評価観を改善するためには、教員養成課程における研究体制や指導の改善が図られなくてはならない。とくに音楽科の鑑賞指導における評価には多くの困難点が横たわっており、解決のための方策が求められている。また、大学での授業改善を図るために、たとえば、指導法の授業演習などで何が課題となっていて、どうしたら学生の自立的な授業力の向上が図られるかを明らかにする必要がある。

(4)音楽鑑賞の指導場面における音楽テクノロジーの活用について、より成果を上げるために、形成的アセスメントに基づく視点からその可能性を検討する必要がある。

２．研究の目的

(1)質的評価を推進するためには、指導のあり方そのものに対する考え方を変える必要がある。そこで、OECD 内の教育研究革新センター（CERI）が提言している「形成的アセスメント（formative assessment）」の概念を整理し、それを生かした音楽授業展開のあり方を研究する。

(2)形成的アセスメントに基づく授業を展開するためには、授業を成立させる周辺的諸条件が整わなくては成果が期待できない。そこで成立のための条件を抽出し、国内外で先駆的に実践している事例を調査し、示唆を得る。

(3)音楽鑑賞指導における指導者の評価視点について課題を明らかにし、その基底にある要因を究明するとともに、学校の教師とのネットワークを介した情報交換により、各自の評価観および鑑賞授業の質を高める方策を検討する。

(4)形成的アセスメントに基づく授業を推進するため、指導者養成課程における授業の方法を工夫する。とくに、教員養成課程における学生の授業評価観に関して、各自が自分の授業演習の何を省察するのか特徴を明らかにし、課題に対する対処法を検討する。

(5)タブレット型端末とクラウドが、音楽鑑賞指導での形成的アセスメントにおい

て、どのような貢献が可能であるかを明らかにする。

３．研究の方法

(1) CERI 報告書（2005）の情報を参考に、形成的アセスメントに基づく授業の要件を整理し、音楽科授業との関連について考察する。

(2)形成的アセスメントに基づく指導を展開するさいに課題となる周辺的な条件を 5 項目掲げ、国内の３市、１県とフィンランドにおける状況を調査し報告する。

(3)音楽鑑賞指導における評価の視点を明らかにするため、小学校音楽科指導者 3 名に同一内容の鑑賞授業を実施してもらい、それぞれが児童の感想文をどのように受け止め、評価に結び付けているか考察する。同時に、そうした指導者間のネットワークを介した情報交換が、それぞれの授業実践や評価観の質をどのように変えていったか考察する。

(4)教員養成課程における授業演習を通して評価観について学ぶ指導の研究を行う。前研究では、クラスメイトの授業演習をどのように評価するかの視点から、学生の授業評価観の特徴をとらえた。そこで本研究では、学生が自ら行った授業演習をどのように振り返っているのかその特徴を明らかにし、そこに見られる課題に対し、教員養成課程ではどのような対処が可能であるか検討する。

(5)タブレット型端末とクラウドを利用した教育事例を紹介しつつ、音楽鑑賞指導における形成的アセスメントの教育的可能性について検討する。

(6)先行する教育学理論に依拠しつつ、音楽科授業の中に形成的アセスメントの視点を取り入れることの意義を明らかにする。

４．研究成果

(1)音楽科の授業に形成的アプローチの概念――①学習の相互作用を促す、②学習のねらいを明確にし、学習者個々の状況を把握する、③学習者個々のニーズに応じた多様な指導方法を用いる、④学習者個々の学習状況を把握するため、さまざまな指導方法を用いる、⑤学習者個々の理解状況を把握し、フィードバックできる方法を用いる。⑥学習者が自己の学習プロセスに主体的にかかわるような指導を行う――を採り入れることにより、指導と評価をより学習者の側に即した適切なものに改善することができる。

(2)形成的アセスメントの視点に立つ授業を展開するためには、学校・地域が一体となって、①学級規模の縮小化、②個々の学習ニーズに応じた指導、③スクールリーダーの養成、④弾力的な評価システムの導入、⑤教育委員会、保護者との連携、に取り組む必要がある。調査した志木市、犬山市、秋田市、秋田県では、いずれも学校、地域、教育委員会、大学間の連携が濃密で、教育成果の向上に繋がっていることがうかがわれた。

(3)音楽鑑賞指導と学習評価の充実に関して、教員とのネットワークによる情報交換により、①鑑賞指導における学力の確認、②他者の考えにふれることによる自身の評価観の改善、③メールを介した情報交換による研修の機会の拡充、等において成果が確認された。

(4)形成的アセスメントを重視する授業を展開するためには、指導者養成の過程におけるさまざまな工夫が求められる。音楽科指導法の授業において、学生らは、教室において授業には欠かせない存在である生徒に十分に視点が注がれていないことがわかった。そこで授業の中にPDCAサイクルを導入することによって、「新たな学びを支える教員の養成と学び続ける教員像の確立」(中教審答申2012)に繋がることが確認された。

(5)音楽鑑賞指導において、タブレット型端末とクラウドを導入することによって、一斉聴取からの開放、時間的・空間的な制約の撤廃、プレゼンテーションやワークシートのマルチメディア化、クラウドを用いた情報の共有、評価支援、指導におけるシミュレーション、擬似楽器を用いた教材曲の体験等が可能となり、とくに形成的アセスメントの観点からは強力なツールとして貢献できることが考察できた。

(6)形成的アセスメントの諸要素を生かす授業を展開するためには、背景に授業実践を支える教育学理論からの援用が必要である。ここでは「本質的な問い」の構築、構成主義的視点の導入、臨床教育学的視点に基づく考察の3点を採り上げ、音楽科授業改善への示唆と提言を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

① 丸山忠璋、音楽科における質的評価とは何か―ナラティヴとしての音楽表現―、武蔵野音楽大学研究紀要、査読有、Vol.42、2010、97―110

② 平田亜矢、日本の音楽科教育におけるYou Tube活用の可能性、武蔵野音楽大学研究紀要、査読有、Vol.43、2011、181－199

③ 山﨑正彦、音楽表現の創意工夫に関する授業改善の試み―音楽的な感受と音楽の諸要素との関わりに着目した創意工夫の試み―、武蔵野音楽大学研究紀要、査読有、Vol.45、2013、139－153

〔学会発表〕（計2件）

① MORITA, Kyoko: Reflective Opportunities in a Method Class: A Symposium on Using reflective processes to improve music teacher preparation and as part of professional development for the career educator. 第30回ISME世界大会シンポジウム、July, 2012

② 宮﨑幸次、音楽科評価に関する研究〈Ⅱ〉、武蔵野音楽教育研究会 2011.1.30

６．研究組織

(1)研究代表者：

丸山　忠璋（MARUYAMA, Tadaaki）
武蔵野音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：70293165

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

宮﨑　幸次（MIYAZAKI, Koji）
武蔵野音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：20366868

森田　恭子（MORITA,　Kyoko）
武蔵野音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：80366872

山　﨑　　正　彦（YAMAZAKI, Masahiko）
武蔵野音楽大学・音楽学部・講師
研究者番号：70424778

平田　亜矢（HIRATA,　Ashi）
武蔵野音楽大学・音楽学部・講師
研究者番号：80424779